令和５年度

研修集録

秋田県立平成高等学校

〒０１３－０１０１
秋田県横手市平鹿町上吉田字角掛６０
ＴＥＬ（０１８２）２４－１１９５
ＦＡＸ（０１８２）５６－３００８

巻頭言

校長　松岡正利

ＶＵＣＡ（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代といわれて久しい。２０１０年代以降、変化が激しく先行き不透明な社会情勢を指して広く使われるようになった。そうした環境下では常に学び続け、学習を継続していくことで学習履歴を更新していき、そしてその結果、何ができるようになったのかを評価していくという社会に変容しつつある。

そうしたな流れの中で高等学校学習指導要領が改訂され、大学入試においても知識中心の入試から、思考力・判断力・表現力や主体性・多様性・協働性を評価する入試へと改革が進められている。

そもそも、社会に出てみるとそこに通用する教科書というものは存在しないし、目の前の問題には正解があるかどうかもわからないこともある。こうした多様な価値観において、場合によっては正解のない問題に対しては、自らが予測したり仮説を立てて行動することや、それまでに積み重ねてきた知識・経験から新しい法則を見いだして、その後の人生で出会う様々な課題をよりよく解決できる行動に結びつける必要が出てくる。

これだけ世の中が変化してきている中で、ＩＣＴ機器の活用も含めた我々教員の授業スタイルも変化が求められている。

「何のために勉強するのか」そのために「何をどのように勉強していくのか」こうした問いに答えられる授業改善を目指していきたい。

令和５年度　研修集録　目次

巻 頭 言　校長　松　岡　正　利

１．校内研修

①各教科の研修記録

（国・地公・数・理・保体・芸・英・家・商・情）　Ｐ１～１０

②令和の授業互見活動（９月）

・感想・意見　Ｐ１１

③公開授業研究会（１０月１２日）（地理歴史・理科）

・開催要項　Ｐ１２

・学習指導案　地理歴史Ｐ１３～１４　理科Ｐ１５～１８

・授業研究協議会記録　地理歴史Ｐ１９～２０　理科Ｐ２１

・全体会記録　Ｐ２２～２３

２．校外研修

Ａ講座（年次研修）

・県立学校新任教頭研修講座　佐々木　輝　雄　Ｐ２４

・中堅教諭等資質向上研修講座（高等学校）　伊　藤　由貴子　Ｐ２５～３５

・実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）秋　元　延　大　Ｐ３６

Ｃ講座

・生徒が科学的に探究する高等学校理科の授業づくり　藤　谷　希　Ｐ３７

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（　国　語　科）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	言語活動の充実を図り、国語を的確に表現する力を伸ばすための指導法を工夫する。

Ⅰ　重点目標

1　語句の読み書きと語意を理解する力を高め、その定着をはかる。

2　話し合いや発表の場面での適切な表現を身につけさせる。

3　文章の構成や展開を意識した表現を身につけさせる。

Ⅱ　研修計画

1　校内漢字力テストで語彙力の充実を図る。漢字検定の受検に際し、目的意識を高めて資格取得を目指す。

2　授業内容を精選し目標を簡素化するとともに、必要に応じてグループでの話し合いや発表を組み込み、達成感のある授業を工夫する。

3　家庭学習の習慣が身につくように予習項目をはっきりさせるとともに、小テストを定期的に実施する。

Ⅲ　授業改善計画

1　前時の内容確認や本時の振り返りに生徒の発言や話し合いを取り入れる。

2　暗唱や音読を積極的に実施し、多様な表現法を吸収させる。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

今年度は中堅教諭等資質向上研修の対象である教員がいたため、科内で授業参観をしたり、情報共有したりする機会を多く設けるなど、授業改善に向けた取り組みを積極的に行うことができた。短歌の鑑賞会やビブリオバトルなど、生徒が話し合いや発表する場面を組み込み、言語活動を多く取り入れた授業を行った。校内漢字テストは、各学年で生徒の実態に合わせた課題を与えるなど、語彙力充実や漢字検定合格を目指した対策をすることができた。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（地理歴史・公民科）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	自ら学ぶ意欲を引き出すとともに、広い視野から社会事象をとらえて分析し、思考し、表現する能力・態度を育成する。

Ⅰ　重点目標

１　学習意欲・基礎学力の定着を高めるために、指導方法の工夫や教材の開発などにつとめる。

２　各科目相互の指導事項・指導内容の連携を図り、社会に対する多角的視野の育成を目指す。

３　多様な進路志望を考慮しつつ、指導内容の精選や適切な指導につとめる。

Ⅱ　研修計画

１　指導方法の研究と授業での実践。

２　資料の収集と教材化、および効果的提示方法の研究。

３　科内での指導事項・指導内容等の検討。

Ⅲ　授業改善計画

１　発問の工夫（一問一答的な用語確認にとどまらず、「なぜ」「どのように」を問うことで、考察させ、説明させる）

２　視聴覚資料・実物資料・図説資料集などの効果的な活用（資料を活用して考察させる）

３　言語活動の充実（自ら進んで探求するように調べ学習や課題学習を実施し、レポート作成やプレゼンテーション等によって成果と課題を発表させる）

４　ICT 機器の活用によるレポート作成やワークシート・プリントの活用

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

中学校段階までの既習事項が定着していないため、「主体的・対話的な深い学び」を求めながら、適正な進度で授業展開することに苦慮することがある。

新学習指導要領の実施に伴い、１・２年生全員が地理・歴史・公民すべてを学ぶため、科目横断的に必要となる「社会的な見方・考え方」を身につけることも、本校生徒の重要な課題の１つである。

解決の手段として、教師側が ICT 機器を活用して生徒の興味・関心を高めること、授業の効率化を図ること、生徒が ICT 機器を活用することで自身の表現力や思考力向上に努めることを、積極的に行ってきた。秋に実施した歴史総合の研究授業にも、その成果が十分に表れていたと感じている。

次年度、全学年新カリキュラムに統一されるため、１年次から３年次までの継続した指導の成果と、それに伴う新たな問題が見つかると考えられる。その把握と対応が今後の課題となる。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（数学科）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	基礎学力の定着と積極的な思考を促すための授業づくり

Ⅰ　重点目標

1　基礎学力の定着
2　生徒の考えを引き出す発問の工夫
3　多様な進路に対応できる学力の育成

Ⅱ　研修計画

1　校内研究授業
2　高教研数学部会総会授業参観、情報交換会
3　数学部会研究大会
4　他校、他教科の授業研究会や授業研修会に参加する

Ⅲ　授業改善計画

1　授業のはじめに、前時の基本事項を確認する。
　演習時間を多く確保するとともに、生徒同士で教えあう機会をつくる。
2　発問では、「なぜか」を問い、説明させる。
　板書や課題、考査の答案で、過程をきちんと書き数学の用語を用いて説明するよう徹底する。
3　進路に応じて課題を与え、繰り返し学習させる。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

・近年新型コロナウイルスの影響により、中止となった研究会等が多かったが、本年度は高教研数学部会研究大会も実施され、授業研究会や他校との情報交換の機会もあり研修は充実していた。また、定期的に課題を課し、添削指導を行うことにより、学習習慣の定着に努め、問題を解く上でどのように考えたかを発表させることにより、論理的に説明する力の育成を図った。また、朝学習に課題を提出し添削指導を行ったり、長期休業中に補習を行い、基礎学力の定着や問題解決力の向上に努めた。３年生には、授業で就職問題や大学入試問題を繰り返し演習するとともに、個別指導により進路実現に向けた学力向上を図った。また本年度より始まった「令和の授業互見活動」も念頭にいれ、普段より互いの授業を観る雰囲気ができ、教員同士の授業の意見交換が活発になった。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（　理　　科　）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・対話的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	自然事象を科学的な視点でみつめ、論理的に考える態度の育成

Ⅰ　重点目標

1　実験・観察を通して、科学への興味、関心を高める。

2　日常生活に関連した教材を用い、主体的に学ぶ力と意欲の育成を図る。

3　言語活動を積極的に取り入れた授業を展開することによって積極的な学習態度と表現力を育成する。

4　教材を精選し基礎学力の定着を図る。

Ⅱ　研修計画

1　各科目において実験、観察を多くし、発表や説明など言語活動を効果的に取り入れた授業の展開に努める。

2　本時のねらいを明示し、日々の出来事や身近な事象を取り上げ、その根拠を探る授業の実践を通して、「わかる授業」の工夫に努める。

3　入試問題の傾向や難易度をしっかりと把握し、小テストや単元毎のテストや演習などを通じて生徒へ還元する。

Ⅲ　授業改善計画

1　実際の教材にに触れる機会・体験を増やし、観察やデータを元に結論を導き出す手法と思考を時間をかけながらも継続させる。

2　上級学校の試験問題の難易度、傾向把握と情報収集によって教材精選を含めた学力養成を図る。

3　発表、討論など言語活動をできるだけ取り入れ、積極性の養成も心がける。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

実験、観察を実施し、生徒の理解を深めることができた。また、身近な事例を取り上げ、「わかる授業」の工夫に努めることができた。発表・討論・話し合いなどを通じて表現力と積極性の養成をすることができた。しかし、理解してもその内容を定着させることが難しく、学力の定着のための工夫が必要だと感じた。

上級学校の入試に向けての指導について、今年度は進路に理科の筆記試験を必要とする生徒が居らず、また、口頭試問に関しても理科として関わることがなかった。来年度は進路実現に理科の筆記試験が必要となる生徒がいると予想されるので、放課後の特別補習等を考えていかなければならないと思う。

「わかる」から「使える」知識にしていくための授業改善を心がけていきたい。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（保健体育科）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	明るく豊かで、活力ある生活を営む態度を育てる

Ⅰ　重点目標

1　自己健康管理能力の育成

2　健康・安全に留意し、計画的・継続的に運動ができる能力と態度の育成

3　運動の楽しさを知り、積極的に運動する態度の育成

Ⅱ　研修計画

1　個々の心身の状態に関心を持たせ、体力を維持・向上させるための授業

2　規律を重んじ、自発的・積極的・協力的に活動する授業

Ⅲ　授業改善計画

1　運動に関する課題解決能力を育む授業

体育や保健で身に付けた知識を関連づけ、課題解決に向けた活動を取り入れた授業の充実を図る。

2　すべての生徒が運動の楽しさや喜びを味わえる選択制授業の充実

一人一人の運動経験や技能の程度などを把握した上で、選択制授業を充実させ、自らが選択した種目への責任感を持った積極的な参加と、各種目の準備や片づけ、試合の運営等の実践と継続的な体力の向上を目指す。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

運動能力が全体的に低く、運動経験も少ない生徒が増えている。そのため、基礎技能の習得から簡易ゲームの運営まできめ細かく指導し、意欲的に活動できるよう支援した。その結果、学習したことを活かし、生き生きと主体的な活動ができるようになった。ほぼだらける生徒もおらず、仲間と協力して運動を楽しむ授業が展開できた。しかし、さらにレベルの高い技術の習得や、ゲームの企画や運営を自発的に行う力はまだ乏しいため、有効な練習方法を提示するなど思考力を育む支援も行っていきたい。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（芸　術　科）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	基礎的な能力を伸ばし、表現と鑑賞に主体的、協働的に取り組む生徒の育成

Ⅰ　重点目標

1　芸術的な感性を育む教材の精選。

2　表現や鑑賞の基礎的な能力を伸ばすための基本指導。

3　美に対する感性を高め、芸術の幅広い自主的実践活動を目指す。

Ⅱ　研修計画

〈音楽〉
①実技のための楽典、読譜力の向上
②西洋音楽、日本音楽の時代的作曲様式観の理解を ICT を通して深める

〈美術〉
①理論と実技の一体化
② ICT を活用した表現の充実

Ⅲ　授業改善計画

〈音楽〉
基礎的な楽典学習やリズム打ち、階名唱を通して読譜力の向上を図りながら、表現の能力を伸ばす。また、ICT を活用して音楽史や作曲様式の学習と鑑賞を結びつけながら、楽曲の理解や鑑賞の能力の向上を図る。

〈美術〉
表現や鑑賞の実践的活動が主体的に広げられるような ICT の活用と幅広い分野の鑑賞の充実。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

〈音楽〉
音符、休符、音名、など基礎的な楽典を学習し、楽譜の理解を図った。
音楽史の授業では、西洋音楽史だけでなく、日本音楽史と絡めて、歌唱、舞踊の一部を実践したことでより興味関心をもって鑑賞することができた。今後は、リズムアンサンブル活動にも取り組み、表現と鑑賞を関連を図りながら、授業を進めていきたい。

〈美術〉
ICT の活用によって、主体的な活動がみられ表現の幅を広げるとともに鑑賞の幅を増やすことができた。また基礎的な技術・表現・鑑賞の活動で、理解を図るとともに美への追求へとつなげることができた。今後は ICT の更なる活用を通し、幅広い分野の表現・鑑賞の充実を進めていきたい。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（　英語科　）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	教科の知識・技能を活用する学習を充実させ、実践的な能力を伸ばす。

Ⅰ　重点目標

1　家庭学習を習慣づけ、基本事項を定着させる。

2　意欲・関心を高め、主体的な学習態度を育成する。

3　検定対策・大学受験対策のため教材の精選を図り、進路希望に応じた指導を工夫する。

4　異文化理解を深め、国際的な感覚や広い視野を持たせる。

Ⅱ　研修計画

1　予習、復習の課題を明確にする。
単語テスト、朝学習、週末課題等にしっかりと取り組ませる。

2　校内外の授業研修会に参加し、指導能力向上と授業改善に努める。

3　検定対策・大学受験対策の補習や添削指導を行い、主体的な学習習慣を確立させる。

4　ＡＬＴとの TT を積極的に活用し、四技能の実践的能力を育成する。

Ⅲ　授業改善計画

1　単語テスト、小テスト、週末課題等で基礎力や学習習慣を定着させる。

2　新学習指導要領に沿った授業展開について研修する機会を多くもち、校外研修の内容や指導技術を科内で共有し、実践する。

3　各種英検対策や、大学進学希望者向けの補習・個別指導を充実させる。

4　ICT を活用した ALT との授業で、異文化理解を深める機会を取り入れる。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

1　予習用プリントや教材を活用させ、やるべきことの明確な指示を通して、主体的態度で学ぶ姿勢を身につけさせた。また、考査前後のノートチェックでは、学習状況の把握と理解度の確認を行い指導に役立てた。朝学習や家庭学習（宿題）と連動させて知識の定着を図り、十分に理解させながら学習習慣を定着させることができた。

2　高教研全県大会の事務局校として、地区の高校と連携しながら準備・運営に携わり、大会の成功に尽力することができた。協議会では問題意識を持ちつつ積極的に意見交換ができ、授業改善に役立てられる貴重な機会を得た。

3　英検受検者に対して、長期休業中にリスニングの補習とライティングの添削指導を行った。受験対策としても添削指導を行い、レベルアップ問題に取り組ませ、進学意識の向上を図ることができた。

4　ＡＬＴとのＴＴ等では Chromebook を使い本文の内容把握を深める活動を積極的に行った。できるだけ多くの情報を聞かせたり読ませたりしてから、それに対する質問に英語で答えたり、自分のことを英語で書いたり話したりする活動を継続的に行い、観点別評価にも活用することができた。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（家　庭　科）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	家庭生活に必要な基礎的知識・技術を身につけさせ、生活の充実向上を図ろうとする能力と態度を育てる。

Ⅰ　重点目標

1　生活の多様化や生徒の実態に即した指導内容を工夫し、学習意欲を高める。

2　基本的な知識・技術の定着を図り、成就感を得られるような指導を工夫する。

Ⅱ　研修計画

1　進路や生徒の実態に即した授業内容の精選。

2　様々な体験実習やグループ活動などにより、発見や気づきがある授業の工夫。

Ⅲ　授業改善計画

1　挨拶、返事、授業態度や提出物などにおいて、社会生活を意識した規律ある授業の雰囲気を作る。

2　基礎的知識・技術との関連性を図りながら、発見や気づきが生まれるようなスモールステップアップを意識した実習や体験学習を展開する。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

1　実習では作品や調理完成までの流れをしっかり確認し、毎時間に確認をさせた。自然に互いに教え合ったり、助け合う様子も見られるなど、生徒間に役割分担ができ、意欲的に学習する様子が見られた。
挨拶や返事、言葉使いについては学年での指導が行き届いてるようで、教科のほうでの指導は特段、なかった。

2　スモール・クエスチョンを適宜取り入れ、ペアまたはトリオ等の少人数での意見交換や情報共有、さらにクラス全体での意見交換の時間を設けた。各分野において家庭生活で起こりえる課題を想像し、解決に向けてに積極的に相談したり、意見を共有するなどという雰囲気ができ、将来の自立した家庭生活のための知識と技術の必要性を実感し、今から自立に向け心がけて生活していこうとする意欲が生まれた。

○　今後はより家庭生活に身近かであり、実践的な教材や題材を授業に取り入れていきたい。特に金融教育は民間企業（銀行・保険会社など）で出している高校生向けの教材が多数あるので、精選して活用していきたい。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（商　業　科）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	魅力的な授業づくりに向けた授業改善に取り組むとともに、キャリア教育を重視し、知識・技術を定着させ、自分で課題を見つけよりよく問題解決を図れる確かな学力を持った生徒を育成する。

Ⅰ　重点目標

１　ペアやグループによる話し合いや発表等の授業方法を取り入れ、魅力ある授業づくりに努める。
２　経済社会や実務に即した基礎的・基本的なビジネスに関する知識・技術を習得させるとともに、資格取得の達成に努める。
３　地域と連携し、体験的な学習を進めることにより、社会に総合的に対応できる実践的能力を育てる。
４　授業を通した規律指導を行い、経済社会の一員としての心構えやマナーを身に付けさせる。

Ⅱ　研修計画

１　魅力あるビジネス教育を展開するため、経済社会の動向や商業教育の新分野研究を目的とした各種講習会や研究会に積極的に参加し、より専門性を深める。
２　生徒の学力向上のために、科内で授業見学や研究会を行い、将来に活かせる知識・技術を育むような授業改善ならびに授業力向上に努める。
３　課題研究において、時事的問題を教材研究に生かし、生徒の学習への興味・関心を高めることできるよう努める。

Ⅲ　授業改善計画

・問題演習に終始するのではなく、言葉の意味や取引の内容についても説明や発問をする。
・繰り返し課題に臨ませてスキルアップを目指し、基礎的技術を定着させる。また、身に付けたスキルを発展的に活用できるような場面設定を工夫をする。
・取り上げる教材をできる限り最新なものにし、また実際に即した教材を用いるようにする。
・地域貢献活動について、３年生を中心に１・２年生も各種の事業に積極的に参加・協力する。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

・年間を通して全商情報処理３級、全商簿記３級、全商ビジネス文書３級等で８割超の合格率となった。また、全商簿記１級５名、全商ビジネス文書１級２名、全商ビジネス計算１級２名の合格者が出た。今後も受験級や受験時期について検討しながら、全体的な底上げができるよう粘り強く指導していきたい。
・総合ビジネス科１・２年生５２名が「横手やきそばフェスティバル」にボランティアスタッフとして参加した。市役所や観光協会の方々、秋田大学の学生と共に活動したことで学びの多い体験となったようである。事後アンケートでは９割以上の生徒が「楽しかった」「もっとやりたかった」と答えた。総合ビジネス科の特色の１つとなるよう今後も継続して参加したい。
・課題研究では、例年に比べて成果を上げることができなかった。研究テーマの設定方法や進め方を考え直したい。
・数年間使用していなかった総合実践室を整理し、新年度の授業で活用できるよう教室環境を整えたい。

令和５年度

校　内　研　修　記　録

（情　報　科）

研究主題 （主テーマ）	生徒の主体的・協働的な学びを推進するための 魅力ある授業づくりの実践
教科テーマ	情報社会に対応できる技能と態度を育てる。

Ⅰ　重点目標

1　情報の収集・加工・発信の能力の育成。

2　情報モラル・マナーなど情報を活用する態度の育成。

Ⅱ　研修計画

・グループディスカッションや発表会を行うことにより、表現能力やコミュニケーション能力の向上を図る。

・実社会に即した事柄やデータを実習に取り入れながら、各種ソフトフェアの活用能力や情報の表現能力の向上を図る。

Ⅲ　授業改善計画

・基本的なワープロソフトや表計算ソフトの活用のしかたをしっかり身につけさせる。

・卒業後、必要となる情報・通信機器に関わる知識(重要用語)や技術(操作能力)やモラル・マナーをバランス良くかつ全範囲にわたって身につけさせる。

・調べ学習、課題作品の作成、発表会、相互評価等において、生徒同士が話し合うことや教え合うことを奨励し、より良い作品の作成・イキイキとした学習活動を目指す。

Ⅳ　実践の成果と今後の課題

授業の初めと終わりのあいさつや自分の席に着いたら電源を入れる。授業の終わりにはマウスとキーボードを所定の位置に戻すなどのルールを徹底させるようにし、精密機械であり、公共の物で一人１台の授業環境を守るために大切に扱うようにさせた。現在の情報科社会において絶対に必要である知識と技術であることを強調しつつ、実技のみに偏った授業にならないように注意しながら、生徒の興味関心を失わせないように、実技の時間を配分するようにした。タイピングなどの基本的な操作と実践的な応用操作ができるように教材を与え工夫するように心掛けた。概ね生徒は興味関心を示して取り組んでいた。

新教育課程となり、内容がさらに多くなり２単位ではすべての内容を授業することは不可能であり、教材の精選が必要であると実感している。本校生徒の進路希望や実態に合うような授業内容にすることが大切である。生徒に作品や調査内容を発表し合える機会を作り、皆の前で自分の考えを話させることでコミュニケーション能力を身につけさせることに繋がっていくと思う。

令和の授業　平成の互見活動　　重点活動期間：９月４日～２２日

教科の枠にとらわれず、できる限り多くの授業参観を行う。
形式にこだわらず、いつでもどこでも相互の授業を参観できるようにする。
参観結果を共有することで職員の気づきの機会を増やす。

授業参観の感想・意見

項目：　①学習課題の提示・確認　②思考判断　③言語活動
④板書の工夫　⑤発問　⑥その他

日付	教科名	科目名	授業担当者名	項目番号	コメント・感想・意見	入力者名
9月5日	英語	英ＣＩ	大塚繁太郎	③	ＡＬＴは簡単な英文で生徒を引きつけていた。	松岡正利
				⑥	ＡＬＴの出身地や趣味等が生徒に伝わる授業であり、彼女の専門の言語学が生かされた授業だった。	
9月6日	数学	数学Ⅱ	田中　剛	②	始めに近くの生徒同士で考えさせ、発言しやすい雰囲気作りを行っている。教科書の解法だけでなく、授業の流れからの解法も示しており多様な思考ができる授業である。	松岡正利
				④	生徒がノートをきちんととれるよう配慮された板書を行っている。	
9月6日	商業	簿記	大沼　理佳	⑥	指名以外でも、生徒の氏名を会話の中で多く取り入れて授業に意識をむけさせたり、生徒のつぶやきを聞き漏らさずに対応したり信頼関係作りが上手でした。	佐々木　優子
9月19日	家庭	家庭基礎	齊藤菜穂子	③⑥	生徒が集中して見続けられるビデオを使用して惹きつけていた。最後まで参観できなかったが、感想を共有する展開を期待したいと思った。	田中　剛
9月20日	商業		佐々木優子	④⑥	電子黒板の使用や様々な掲示物があり、見やすくわかりやすい授業だった。生徒が当てはめやすい計算式の板書だと思った。	伊藤由貴子
9月20日	商業		大沼　理佳	④⑥	仕損品という言葉を初めて聞いた私でもなるほど思う説明だった。説明のあとすぐ実践してみようという流れがわかりやすかった。	伊藤由貴子
9月20日	商業	ビジネス基礎	糸井一保	④⑥	１年３組の生徒が非常に静かに真面目に授業を受けていたのは印象的だった。小切手の書き方について私自身も初めて聞く内容で非常に興味深かった。	鈴木　牧雄
9月20日	商業	財務会計	佐々木優子	④⑥	フラッシュカードが丁寧に作られており、大変見やすかった。トヨタやニッサンの具体的事例が大変分かりやすかった。黒板も電子黒板も大変見やすく分かりやすいものだった。タブレットで最後に内容確認を行っていたが、授業の最後に理解度を核にする手法としていいものだと思った。	鈴木　牧雄
9月20日	商業	原価計算	大沼　理佳	④⑥	原価計算の話は、私自身が初めて聞く内容で、ビジネス科の生徒は難しい内容をやっていると感じた。板書が丁寧で見やすかった。	鈴木　牧雄
9月20日	保健体育	保健	秋元　延大	②⑥	生徒に発言を引き出させる話術や実際に体を動かせて考えさせる授業の構成が良かった。既習事項との関連を大事にして生徒が身近に考えることの出来る授業展開も勉強になった。	赤塚　裕人
9月21日	国語	現国	釜田	④⑥	テンポの良い授業。声が聞き取りやすく、生徒が理解しやすいように例示を工夫している。	
9月6日	地歴	日本史探究	栗田　未来	②④	電子黒板と生徒の扱うワークシートをリンクさせ、生徒のスムーズな理解を促していた。生徒と対話しながら授業を進めていく方法のよい勉強になった。	赤塚　裕人
9月12日	保健体育	体育	秋元　延大	①②⑥	生徒への指示が明確かつ簡潔に伝えられていた。指導者が一方的に指示を出すのではなく、生徒自身に考えさせて活動を選択させたところが良かった。服装に統一感があり同じ目標に向かう雰囲気づくりができていた。	大滝　花子
9月11日	保健体育	体育	伊藤　敬子	⑥	サーキットトレーニングが出来ない生徒が目立った。１３クラスだったが、このクラスは出来る方と聞いて更にビックリ！スマホの弊害だろうか？	山元　裕
9月20日	商業	ビジネス基礎	糸井一保	③⑤	なかなか落ち着かないクラスではあるが、授業への参加態度もよく、先生の普段の指導が伺われた。生徒の分かる言葉を選んでの指導が印象的だった。現物資料を用いての展開も実態に即した効果的なものであったと思う。	佐々木　輝雄
9月20日	商業	原価計算	大沼　理佳	③⑤	見ている先生が多かったせいか、生徒たちの緊張が伝わってきた。生徒の理解、技能の練度に応じた声がけが効果的に行われていた。	佐々木　輝雄
9月20日	商業	財務会計	佐々木優子	②⑥	実際の企業実績から状況を分析し、成長戦略を考えさせる展開は、専門科目ならではのもの、しっかりした準備とＩＣＴの活用が工夫されていた。	佐々木　輝雄

令和５年度　平成高校　校内授業研究会　開催要項

1　実施教科　**地理歴史・公民科、理科**

2　期　　日　**令和５年１０月１２日（木）**

3　日　　程

（１校時～５校時は４５分授業　　５校時は全クラス授業参観）
１３：４５～　　清掃･ＳＨＲ　当該クラス以外は放課
１４：１０～１５：００（50分）　研究授業
１５：１５～１６：０５（50分）　授業研修会
１６：２０～１６：５０（30分）　全　体　会（会議室）

4　授業一覧　**１４：１０～１５：００**

教　科	科　目	単　元	対象ｸﾗｽ	会　場	授業者
地理歴史・公	歴　史 総　合	黒船の来航と日本の対応	２年３組	２年３組教室	鈴木牧雄
理　科	化　学	電池と電気分解	２年１組 ２年２組	化学室	松田達也

5　授業研修会　**１５：１５～１６：０５**

教　科	会　場	司会者	記録者
地歴科	会　議　室	沼　倉	栗　田
理　科	保育実習室	加　藤	藤　谷

・会次第
　① 授業者より感想・反省等
　② 参観者より意見・感想等
　③ 指導主事より助言等

・観　　点
　・ **授業について**　（思考力･判断力･表現力を高めるような授業の工夫等）
　・ **教師の働きかけについて**（発問の工夫、発言の取上げと発展の工夫、指示の工夫等）
　・ **生徒の活動について**　（意欲的な学習活動、発表のしかた等）
　・ **評価について**　（意欲を引き出す評価、評価の観点や方法の工夫等）

6　全　体　会　**１６：２０～１６：５０**

会　場　：　会　議　室

記録者　：　教　務　部

地理歴史科（歴史総合）学習指導案

実施日時：令和５年１０月１２日（木）６校時
場　　所：２年３組教室
対象クラス：総合ビジネス科２８名
授　業　者：教諭　鈴木　牧雄
教　科　書：『明解　歴史総合』（帝国書院）

1　単元名
２部　近代化と私たち　４章　アジア諸国の動揺と日本の改革
第４節　黒船の来航と日本の対応

2　単元の目標
・近代化の歴史に関わる諸事情について、世界とその中の日本を広く総合的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近代化の歴史を理解するとともに、諸史料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
・近代化の歴史に関わる事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力や、考察したことを効果的に説明したり、議論したりする力を養う。
・近代化の歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究しようとする態度を養う。

3　単元の教材観
イギリスに始まる産業革命以来、欧米諸国による本格的なアジア進出に際し、東南アジアや南アジアが次々と植民地化されていく。西アジアや東アジアの国々は近代的科学技術の導入と国民国家の形成を目指すことで対抗しようとした。日本では、欧米諸国のアジア進出という国際情勢の中で、外交政策の転換である開国が大きな国内政治の変化と連動した。本時は日本の開国をめぐって、複数の史料の読み取りから、日本は欧米諸国の進出に対し、どのように対応してきたかを考察させたい。

4　単元計画（全６時間）
1　「西洋の衝撃」と西アジアの変化　・・・1
2　南・東南アジアの植民地化　・・・1
3　ヨーロッパの日本接近とアヘン戦争　・・・1
4　黒船の来航と日本の対応　・・・1／2（本時）
5　新体制の模索と江戸幕府の滅亡　・・・1

5　単元の評価規準

知識・技能（A）	思考・判断・表現（B）	主体的に学習に取り組む態度
産業革命と交通・通信手段の革新、中国の開港と日本の開国などを本に、諸史料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめ、工業化と世界市場の形成を理解している。	産業革命の影響、中国の開港と日本の開国の背景とその影響などに着目して、アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、アジア諸国と欧米諸国との関係の変容などを多面的・多角的に考察し、表現している。	近代化の歴史に関わる諸事情について、見通しをもって学習に取り組もうとし、学習を振り返りながら課題を追究しようとしている。

6　生徒観

総合ビジネス科２８名のクラスである。明るく元気で、授業への取り組みも良く、教師の発問に対しても、良い反応が見られる。ビジネス科の生徒であり、情報機器の扱いも手慣れている。ただ自分の意見を発表し、文章にしてまとめる作業を苦手としている生徒もおり、グループでの話し合いを通じて、自分の意見をもてるようにしたい。

7　本時の指導目標

幕府の交渉の成果を検討・評価することを通じて、幕府の外交交渉を多面的・多角的にとらえ、自分の考えを適切にまとめることができる。

8　指導の過程

過程	学習活動	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 (5分)	本時の学習内容の確認	・本時の目標を提示する。 **学習課題：幕府の交渉は失敗か、失敗とはいえないか。**		
展開 (35分)		**Q.幕府の交渉はうまくいったか、いかなかったか？** ・A～Dについて班ごとに検証した内容をグループ内で共有する。 ・失敗か、失敗とはいえないかを判断し、評価する。	・Google jamboardに意見を入力させる。 ・グループ内で、前回エキスパート活動で調べた内容を報告する。 ・Google formsを活用して個々の評価を共有する。電子黒板で掲示し、グループの代表が発表する。	・各種史料から、幕府の外交交渉を多面的・多角的に考察している(B)。 (jamboard, form)
まとめ (10分)		本時の授業内容や他の生徒の意見も参考に自分の意見を文章でまとめて提出。	机間指導で助言する	

理科(化学)学習指導案

日　時　令和５年１０月１２日

授業者　松田　達也

場　所　化学室

使用教科書　実教出版　化学

１　単元名

第２章　２節　電池と電気分解

２　単元の目標

(1)電池や電気分解の原理を理解している。【知識・技能】

(2)水溶液と電極の組み合わせから、電池や電気分解における各電極での反応をイオン反応式で書くことができる。【思考・判断・表現】

(3)定量的な実験における、探究する態度を身に付けようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

３　単元と生徒

(1)本単元について

中学校では、電池や電気分解において定性的に学習している。金属のイオン化傾向については、化学基礎で学習し、電池の原理や実用電池に触れており、電気分解のしくみについても学習している。

化学では、金属のイオン化傾向をもとに、電池の原理やダニエル電池について学ぶ。電池が、化学エネルギーから電気エネルギーを取り出す装置であることや、実生活には欠かせないものであることを学習する。

電気分解は、電池とは反対に電気エネルギーを化学エネルギーに変換する反応であることを学ぶ。ファラデーの法則をもとに、電気分解の量的関係について学習する。水溶液や電極の組み合わせを工夫することで、工業的な応用がされていることを学習する。

(2)生徒の実態

男子４名、女子８名

普通科化学選択者１２名。進学希望者と就職希望者が混在するクラス。普段は別々のホームルームに所属している。課題に一生懸命取り組む姿勢や分からなければ周囲と協働して解決しようとする姿勢がある。普段の生活や授業においても反応は良い。

(3)本単元の指導について

金属のイオン化傾向の知識をもとに、物質には酸化されやすさや還元されやすさがあり、これにより電池の起電力の大小が決まることや、電解精錬や溶融塩電解のような工業的な応用例があることを学習する。

電気分解においては、水溶液と電極の組み合わせにより各電極で起こる反応をイオン反応式で書くことが重要となる。また、ファラデーの法則を用いて反応物や生成物の量的関係を求めることも重要である。ここでは、新たに電気量について学習するため、中学校で学習した電気分野の復習も必要となる。

4　単元の指導

(1)　単元計画

時	内容	時	内容
1	電池の原理、ダニエル電池	5	電気分解の量的関係(2)
2	実用電池、鉛蓄電池	6	電気分解の工業的な利用(1)
3	電気分解の反応	7	電気分解の工業的な利用(2)
4	電気分解の量的関係(1)　本時		

(2)　評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
電池や電気分解の原理を理解している。	水溶液と電極の組み合わせをもとに、電池や電気分解における各電極での反応をイオン反応式で書くことができる。	ファラデーの法則の検証実験における観察や考察を通して、ファラデーの法則について理解を深めようとしている。

5　本時の計画（本時 4/7 時間）

(1) 指導の目標

・電源装置や電流計を適切に扱い、定量的な測定をすることができる。　【知識・技能】

・定量的な実験における、探究する態度を身に付けようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

(2)　学習の過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評　価
導入 5 分	・ファラデーの法則の検証実験(希硫酸の電気分解)の説明を聞く。	グループ	・実験の説明をする。 ・各電極での反応のイオン反応式を確認する。	
展開 25 分	【学習課題】　電気分解における生成物の量は電流の大きさや反応時間とどのような関係にあるか？			
	・直流電源装置、電流計、導線、ホフマン型試験管、希硫酸を準備する。 ・実験装置を組み立てる ・電源装置、電流計、計時、記録の役割分担をする。	グループ	・安全に配慮し、実験器具、試薬を配付する。 ・班ごとに異なる電流値を指示する。	
	【発問】　生成物の量と電流の大きさと反応時間との関係はどうなるか、根拠をもって予想しよう。			
	・実験結果について予想を立てる。 ・実験する		ら予想を立てさせる。	・適切に電源装置や電流計を扱っている。【知識･技能】（観察）
まとめ 20 分	・記録したデータをもとに、グラフを作成する。 ・予想と結果を比較する。	グループ	・目盛りの取り方を指導する。 ・グラフの比例定数(mL/s^{-1})を求めさせる。	生成物の量と電流や反応時間との関係について考えを深めている。【主体的に学習に取り組む態度】（プリント）

ファラデーの法則の検証実験

実験日　　月　　日　　組　　番

氏名

＜目的＞

・電気分解の生成物の量と電流の強さと反応時間との関係を検証する。

・電源装置や電流計を適切に扱う。

＜手順＞

1.ホフマン型試験管、導線、電流計、スタンド、電極を右図のように組み立てる。

※電極のゴム栓しっかり差し込む。

2.希硫酸、時計皿、安全眼鏡をもっていき、ホフマン型試験管を希硫酸で満たす。

※コックを開けてから、滴下漏斗に希硫酸を流し込む。試験管内に空気が残らないように希硫酸を満たしたらコックを閉じる。希硫酸を入れすぎて、試験管の先端部分から噴出さないように注意する。希硫酸をこぼしてもあわてない。

3.電源装置のつまみが 0 V になっていることを確認したのち、電源を入れる。つまみを回し、電圧を上げていき電気分解し、電流値を調節する。陰極で生成する気体の体積が、計測しやすい目盛りに到達した時点を 0 秒として、経過時間と気体の体積を測定する。滴下ろう斗の高さがホフマン型試験管内の液面の高さと等しくなるように注意する。

4. 30 秒間隔で 600 秒計測したところで測定を終了する。測定を終了する際には、電圧計のつまみを 0V に戻してから電元装置の電源を落とす。

＜片付＞

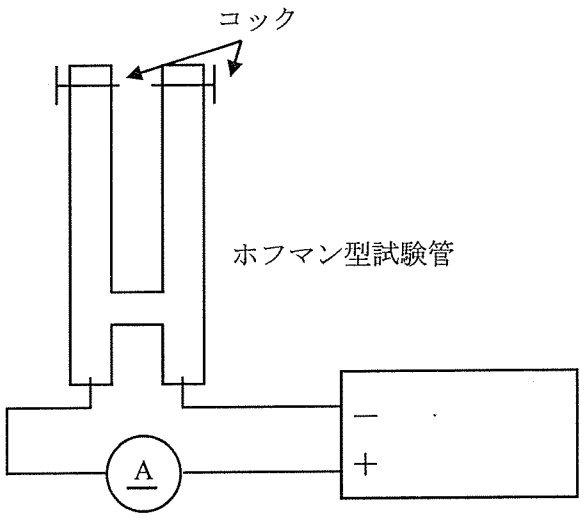
1.コックを開けた後、希硫酸を滴下ろう斗からビーカーにもどす。使用済みの希硫酸は教卓に戻す。

※試験管にたまった気体が先端部分から放出されるので、一気にコックを開けない。希硫酸が噴き出す。

2.ホフマン型試験管と電極を水で洗い、試験管はスタンドに立て、コックを開けたままにしておく。

＜実験の予想＞

電気分解の生成物の量は



電源装置

＜結果＞

電流値　　A

時間(秒)	0	30	60	90	120	150	180	210	240	270	300
体積(mL)											
時間	330	360	390	420	450	480	510	540	570	600	660

ファラデーの法則の検証実験

実験日　　月　　日　　組　　番

氏名

(秒)											
体積(mL)											

＜グラフ＞

＜メモ＞

令和５年度第２回指導主事学校訪問　授業研修会記録【 地歴科 】

記録者　栗田　未来

《授業者より感想・反省点》
・不安もあったが，思いの外生徒がグループ内で発言があり，生徒自身の言葉で考えを発言していてよかった。
・自分の考えを言わせることはできた。
・投票結果もどうなるか不安があったが，生徒たちがよく考えて活動していたため，ほぼ半々の結果になった。
・エキスパート活動も本時にいれようかと思っていたが，２時間に分けたことは成功だった。
・生徒の付箋は，そのまま生徒の言葉を使った。
・時間配分に改善点がある。
・jamboard・form への入力も難しさはあったが，やりたいと思えたところはやれた。

《参観者からの意見・感想等》
Ⅰ　思考を促すための発問の工夫
①　参考になる点・良かった点
・本時の目標，明確な指示があった。
・史料と教材が豊富であった。
・主発問が生徒の考えやすいものであった。
・日頃の指導の様子が見られ，生徒が落ち着いて活動ができていた。
・生徒の意見をうまく活かして解説がなされていた。

②　改善点・疑問
・質問１・２を受けて質問３を考える流れが生徒に浸透していなかった。
・机間巡視の際の教師の発言が誰に対してなのかわかりにくく，注目のさせ方に工夫が必要である。
・最終課題にどう答えればよいのか悩む生徒が多くみられた。
・エキスパート活動が活かされていない部分が見られるところがあった。
・指示が理解できず，なかなか活動に入れない生徒がいた。

③　提案など
・ジグソー活動の共有の際に，教師が主導してもよかったのではないか。

Ⅱ　表現力育成のための言語活動の工夫
①　参考になる点・良かった点
・グループ活動を活かして，根拠を示しながら生徒が自分の言葉で話ができていた。
・jamboard を落ち着いて使用できていた。

②　改善点・疑問
・班の数が多く，話合いの活発さに差があった。
・アンケートの設問の工夫，答えさせ方の工夫が必要。

③　提案など
・jamboard，form の特性を生かした工夫。
・グループの中で役割分担をしておく。
・学習前と学習後の比較ができれば面白かったのではないか。
・タイマーを使用し，生徒にも時間配分を考えさせる。

《指導主事からの指導助言》
〈 義務教育課　高橋指導主事から 〉
・生徒たちの表現力が素晴らしい。
・自分の意見を持っているから，人の意見に関心を持てている。
・時間はあまりなかったが，最後の自分の言葉でまとめる場面では，思考の深まりが見られた。

・最後の教師の言葉を一生懸命に聞こうとする姿勢が見られた。
・教材研究が良くなされていたため，史料の選択や提示の仕方が素晴らしかった。
・歴史総合はまだ試行錯誤が続いている科目である。その過渡期にある科目の中で，今後につながるチャレンジとなっていた。
・「自分が何を選んで，どう総括するか」という問いかけが生徒になされていた。実際，歴総合の内容は「〇〇と私」という構成になっており，歴史的な学びと生徒自身が向き合うことが求められている。
・中学校の授業をぜひ見に行ってほしい。中学校までの学びを踏まえた高校での学びを意識してほしい。実際，生徒の発表のなかにも中学校での学びを踏まえた意見が見られた。

令和５年度第２回指導主事学校訪問　授業研修会記録【 理科 】

記録者　加藤　政夫

《 授業者より感想・反省点 》

＊時間配分がうまくいかず、実験の説明に時間がかかり、主発問に踏み込めなかった。
＊中学校で電流値、電流を流した時間にジュール熱の熱量が比例することを学習しており、それと同様に、電気分解の生成物の量も、電流値、電流を流した時間に比例することを時間はオーバーしたが何とか引き出せた。

《 参観者からの意見・感想等 》

Ⅰ班　田中剛(発表)、佐々木優子、大沼理佳、加藤政夫(司会・記録)
Ⅱ班　山元裕(発表)、佐々木司、松田達也(授業者)、赤塚裕人

①参考になる点・良かった点
＊防護眼鏡の使用やガラス器具を置く位置の指示など、安全面によく配慮してある授業だった。
＊実験を行うと、言語活動、協働につながりやすい。
＊発問が説明に埋没しかけたとき、補助発問を加えて修正をはかっていた。
＊パワーポイントは黒字に白文字で記入してあり見やすかった。

②改善点・疑問
＊実験装置、実験方法の説明が多く、発問が説明に埋没しがちだった。
＊実験前の予想を板書に残すべきだった。
＊生徒はパワーポイントをノートするのが不得意で、遅かったり、正確にノートできない傾向がある。特にイオン反応式は正確に写せないので、あの人数であれば机間指導で確認した方が良い。
＊実験装置の説明は、動画を使うか、人数が少ないので実演すれば伝わりやすかったと思う。前時にホフマン型電解槽の説明をしておけば余裕ができたのではないか。
＊グラフの横軸・縦軸は、班の間で比較しやすいように予め入れておけば良いと思う。グラフの軸をとる練習は今回やらなくても良いと思う。

③提案など
＊実験の結果を班をまたいで議論させれば良かった。
＊生徒が実験の結果のまとめや、考察を発表する場面を入れて欲しかった。
＊最小目盛りからどの位取りまで記入するかの判断や計算の際の有効数字については、物理基礎で主に指導するべき事項であるが、公式の定着を優先し、有効数字には刺さっていない。今後、物理基礎の授業で指導を加えるので、もう少し時間をください。

《 指導主事からの指導助言 》

＊付箋紙を使う授業研究会が定着しつつあるが、付箋紙は授業参観迄に予め配っておけば協議に使える時間を増やせる。
＊探究の過程を丁寧にたどる授業で良いと思う。ただ、「今日の課題何だっけ」という振り返る時間を用意して欲しい。
＊実験の操作の説明については動画にした方が生徒は理解しやすかったのではないか。
＊中学校では防護眼鏡の使用の他、ホフマン型電解槽をプラスチックのバットに入れて使うなど更に細かい安全管理をしている。
＊授業者を褒めるだけではなく、提言や改善点の指摘もある有意義な授業研究会になった。

令和５年度第２回指導主事学校訪問　授業研修会記録【 全体会 】

≪高校教育課　山城　崇　指導主事≫

・文科省より発問の要件４つ。
・質問なのか発問なのか。

・学習課題の解決のために発問がある。逆算し，構造的に発問を配置する。
・学集課題の解決は４つで検証。
　・授業における学習の本質をついているか。
　・具体的な問いかけでゴールまで見通せるか。
　・学習意欲を刺激する魅力的なものか。
　・生徒の実態に応じたレベルと表現か。

≪高校教育課　鈴木　亮　指導主事≫

・学校の雰囲気がとてもよい。
・生徒たちが生き生きしている。
・生徒共に授業をつくる。
・生徒のなぜや概念的知識をもとに課題を設定。
・生徒同士の学び合いが自然。普段の授業における会話のキャッチボールができている。

○生徒指導
　・生徒，保護者対応に苦慮する場面が少なくない。先生方のチーム力のすばらしさを実感している。
　・チーム力のすばらしさがあるからこそ，みんな分かっているはずと思っていても本当はわかっていないことがある。今まではこのように対応してきたからこうだという初めからバイアスがかかった状態で初期対応すると解決に難航することも。これまで学校ではこうしてきたからこうだで対応しきれないケースがある。背景はより複雑化してきている。初期対応がとにかく重要。

○授業改善重点事項

・生徒の思考を促す～　自己評価はいかがだろうか。学びのプロセスを踏むことで，生徒を深い学びに導きたいというおもいがみてとれる。発問だけがひとり歩きしないように。

・課題を抱えている生徒が多い。学習意欲の低い生徒。語彙力の不足。それに伴う自信の不足。課題に対して粘り強く自分の言葉を紡いでいく力。これがないと笑われるのではないかと不安につながる。自信が不足している生徒はわかったふりをするなど，わからないことを隠そうとする。丁寧にやることが悪循環につながることもある。自ら学ぶ主体を育てることが大事。今は学習指導力。学習カウンセラー的な力が求められている。教科指導力への磨きとともに，生徒の器を広げるための指導力も必要。平成高校の取り組みはそのように考えると極めて重要。

高等学校新任教頭研修講座に参加して

教　頭　　佐々木　輝　雄

研修の目的

各学校が直面する喫緊の課題に対して組織的に対応するために、総合的な学校経営力を身に付けることで教頭としての資質向上を図る。

期日・場所

Ⅰ期：令和５年５月１８日（木）　本校（オンライン実施）
Ⅱ期：令和５年６月　６日（火）　総合教育センター

対象

高等学校、特別支援学校の新任副校長（本研修講座の未受講者）、新任教頭

内容・感想

Ⅰ期

講義　「学校の危機管理」
教育庁高校教育課管理チーム主任管理主事　　石井　勇悦　氏

教頭が担うべき学校の危機は生徒、職員に関する学校事故、施設・設備に関する事故等全てに及ぶ。これらについて最も重要なことは未然防止とその対応である。特に未然防止の観点と初期対応の重要さを具体的に学ぶことができた。

講義
「目標管理と人事評価システム」
教育庁総務課副主幹　　澁谷　明人　氏

教員の評価システムの目標については「秋田県教職キャリア指標」と「校長の学校経営目標」と連動する形で各自設定することが望ましい。自らの資質能力を高められる目標を設定することで学校全体の教育力を高められるようにして欲しい。評価に当たっては能力を高める努力に対して積極的に認めて欲しいとのことであった。

講義
「インクルーシブ教育の充実に向けて　－管理職が果たすべき役割－」
総合教育センター支援班主任指導主事　　牧野　幸枝　氏

特別支援教育の現状から、インクルーシブ教育の充実が求められていること、校内支援体制をどのように構築し、実効性のあるものにしていくかが教頭の役割。生徒や保護者に対して、支援体制などについて年度当初に周知することが大切であるとのことであった。

講義
教員のメンタルヘルス「管理職向けのメンタルヘルス講座」
公立学校共済組合東北中央病院　主任臨床心理士　　古澤　あや　氏

メンタルの危機は様々な偶然的な要因により、誰にでも起こり得るものとの認識が必要。教員は自分の危機に気付きにくい、認めにくい特性がある。相談窓口を活用して欲しいとのことであった。

Ⅱ期

講義・演習　「学校組織マネジメント」
秋田大学大学院　教育学研究科　特任教授　　近江谷　正幸　氏

豊富な教育行政の経験から、学校経営に教頭がどう関わるべきかをマネジメントの視点から講義して頂いた。特に、リーダーとして「教員」を「変えていく」視点が必要であること、「他の教員」「保護者」「地域」とつないでいくことを生徒のために力を尽くしてほしいとのことであった。

協議　「学校教育に関する課題とその解決策」
樋口　　隆　氏

協議では各校の課題を持ち寄り、協議の場が設けられた。最も多かったものが多忙化、その次は校内組織、生徒指導と続いた。樋口先生からは管理職としての経験から、教頭は激務、だからこそ心身の健康が大切であること、学校内で違和感を感じたらスルーすることなく原因を究明すること、物事をよく見る余裕を持つことなど、具体的で示唆に富む話をして頂いた。

中堅教諭等資質向上研修講座を終えて

平成高等学校　　伊藤　由貴子

1，センター研修について

今年度、「中堅教諭としての自覚や学校運営参画意識を高め、個々の能力、適正に応じてミドルリーダーに必要とされる資質の向上を図る」ことを目標とした中堅教諭等資質向上研修講座を受講した。概要としては、以下のような内容であった。

○中堅教諭等資質向上研修講座Ⅰ期
　　質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略
　　学校の危機管理
　　学校組織の一員として①－リーダーシップ－
○中堅教諭等資質向上研修講座Ⅱ期
　　高い専門性に基づく教科指導の充実と推進
○中堅教諭等資質向上研修講座Ⅲ期
　　いじめの理解と対応
　　気になる生徒の事例を通した具体的対応の理解
○中堅教諭等資質向上研修講座Ⅳ期
　　教育活動全体を通じたキャリア教育
　　学校全体で取り組む情報教育
　　人間としての在り方生き方を考える道徳教育
○中堅教諭等資質向上研修講座Ⅴ期
　　教育公務員の服務
　　学校組織の一員として②－キャリアデザイン－
　　これからの学校教育

これらの研修を終えて、私が特に印象に残った研修は、Ⅳ期の「教育活動全体を通じたキャリア教育」の講座である。キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア教育を促す教育」と定義されており、卒業時の進路選択の指導だけでなく、校種間を貫いた「社会人、職業人として自立し、時代の変化に力強く柔軟に対応して」いく力であるということを学んだ。今まで私は、キャリア教育についての理解が浅く、「進路指導」と「キャリア教育」の違いをはっきりと認識していなかった。しかし、この講座を受講し、「進路指導」と「キャリア教育」の違いを学び、「教科におけるキャリア教育」について深く考えるきっかけになった。

この講座では、自分の教科である国語の授業でのキャリア教育だけでなく、様々な教科におけるキャリア教育について意見を交換する機会があり、他教科の先生の話を聞くことができた。特に家庭科の先生からは、料理や洗濯の仕方やボタン付けなど簡単な裁縫など自立した生活をするための技能の習得という面があるということを教えていただいた。また、理科の先生からは、「自分自身の身体のしくみ」を知ることは自分の健康について考えるきっかけになり、「自然」について知ることは天気、地震、津波の仕組みの理解につながり生活していく上で欠かせない知識であるという話を教えていただいた。このように、他教科の先生の意見を聞くことで、今まで意識したことがなかった「教科による」キャリア教育という視点を学ぶことができた。

また、この講座で参考資料としていただいた「高等学校におけるキャリア教育の実践」（高校国語）の中に、「羅生門」と「今昔物語」を比較し、「生」について考えさせる授業が実践例としてあげられていた。私自身も「羅生門」を扱うときは、まとめとして「羅生門」と「羅正門」の違いについて考えさせる授業をしたことがあるので、その実践例は興味深かった。この授業は、「他者との関わりの中で、言葉を通して伝え合い、自分の思いや考えを広げ深めることが「自己理解・自己管理能力」や「人間関係形成・社会形成能

力」の育成につながる。」として設定された授業であった。よって、同じ活動でも授業の目的の設定の仕方によってキャリア教育としての能力の育成にもつなげられるのだという発見があった。

そこで私も自分なりに自分の教科である国語を考えた際に、キャリア教育とは、自分以外の「他者」と出会うことであるのではないかと考えた。自分の意見だけでなく多面的な視点を獲得することは「社会的・職業的自立」のために必要である。小説・評論から意図や表現技巧を正しく読み取り、自分の中の他者を育てることで、他者理解の一歩が踏み出せるのではないか。また、その「他者」がいるからこそ人は「自分」の考えを正しく効率的に他者に伝えるために奮闘するのだと思う。

また、古典を学ぶことは「最古にして最新だ」ということを自分が高校時代に教えてもらったが、これの考え方もキャリア教育につながるのではないかと思う。そこでふと思い出したのが、今年度１年生の「言語文化」の授業で扱った「千年の時が与えてくれる安堵」という随筆である。その中に「人間は、千年前の人と同じ悩みで苦しんでいるんだなあ、と思う。社会の仕組みも生活環境もこんなに変わったのに、心の中は大して変わっていない。そう考えるとなぜか心が安らぐ」という一節がある。この考えは、何千年前の人間も今も同じ悩みや考え方をもっているということに対する気づきから、人間の普遍性を感じる文章である。この何千年前の人間と現在の自分に共通点があるという気づきは、「自己理解・自己管理能力」や「人間関係形成・社会形成能力」の育成につながるのではないかと思った。特に、自己理解の面で、自分という存在について考える時に重要な意味をもつと思った。この授業では、最後にこの気づきから自分は長い時の流れの中にいることの「安堵」というまとめをしたのであるが、気づきだけで終わらず「安堵」から自分はここに存在していてもいい、自分の悩みは長い時間の中みんなが共通してもっているものだという「安心」が自己肯定感につながるのではないかと思った。

今後、「自己理解・自己管理能力」や「人間関係形成・社会形成能力」という視点を忘れずに教科でのキャリア教育を実践していきたいと思う。

このように「教育活動全体を通じたキャリア教育」の講座が特に印象に残り、自分の中で深く考察するきっかけになったが、今年度受講した講座や授業研修、高教研国語部会、選択研修、特定課題研究会で学んだことを通して、今後の自分自身の研鑽に努めたいと思う。

２，選択研修について

選択研修として、 浅舞神社にて３日間の日程で浅舞神社にて研修を行った。

（１）研修の概要

７月２６日（水）研修前のお祓い、神社の清掃、お祭りで使用する幣の作成
浅舞神社の古神社の訪問、祈願

７月２７日（木）お祭りで使用する幣の作成、神社の清掃
７月２８日（金）佐藤茅葺店において茅刈り、茅の輪作り
神社にて夏越しの大祓の儀式に参加
茅の輪くぐりの実施

（２）研修の成果

今回、浅舞八幡神社にて選択研修をさせていただいた。一日目は、この研修を受けるにあたって、研修の無事と達成を祈願して修祓の儀を行っていただいた。その儀式にて浅舞八幡神社の御祭神のお話や儀式の執り行い方などについて御講話いただいた。

その後、浅舞八幡神社が本来あった場所である古浅舞八幡神社に連れて行っていただき、神主の本多さんとともに参拝した。

古浅舞八幡神社は、私の普段平成高校へ行く通勤経路から近くにあったことが意外であ

った。田んぼの真ん中にあって気づきにくいのであるが、これからは通勤の際に思いを馳せたいと思った。古浅舞八幡神社から帰宅してからは、紙垂を作ったり、お祓いの際に神主さんが使う幣を作ったりした。紙垂については、私が大学時代に神社でアルバイトしていた時作成していたものと作り方が同じで非常に懐かしい気持ちになった。唯一違っていたのは、和紙の切れ込みがあらかじめ入っていたことである。大学時代は、和紙にカッターで自分で切り込みをいれていたが、浅舞八幡神社では、もう折れば完成になるように切り込みがすでにはいったものが既製品としてあり、最近はいろいろな種類のものがあるなぁと思った。

二日間とも幣を作成したのであるが、幣を作成するのは初めてでとても難しくなれるまで苦労した。特に、木の棒に紙垂を何個かまとめてくくりつけるところが難しく手間取ってしまった。

秋にかけてのお祓いのために３０個ほど幣を作るということで、３０個つくったのであるが、この幣が実際の神事で使用されると思うと感慨深い気持ちになった。

そして、3日目はこの研修のメインイベントである夏越しの大祓の準備と実施であった。平成高校のインターアクト部の３年生の生徒と一緒に、茅の輪くぐりを実際に作って設置し、夏越しの大祓の神事と茅の輪くぐりを行うという計画であった。

はじめに、佐藤茅葺店さんを訪問し、実際に茅の輪くぐりの材料である茅を鎌やはさみで刈る作業をしたのだが、なかなか茅も固くて切れず、生徒も私もかなり苦戦した。

茅のひとつひとつは、少し背の高い草のようであり、すぐに刈れそうな印象であったが、実際に刈ってみると鎌がざっくり入っていかずかなり力が必要で、こんなにも苦労するんだなぁと思い知った。

そして何分もかかり草を刈り終え、佐藤茅葺店さんの力をお借りして茅の輪を作成した。こちらもかなり力のいる作業で私たちは、茅の輪を編む際にぐるりと回す作業しか手伝えなかった。茅の輪くぐりは総じて、根気と体力がいる作業であることが分かった。毎年、神社にある茅の輪くぐりを見ると簡単な作りであるように思うが、かなり難儀して作られているものだということが分かった。

昼過ぎに茅の輪を軽トラックで神社に運搬し、設置した。そして、参拝客が集まり、夏越しの大祓の儀式が挙行された。今回神主の本多さんのご厚意により、儀式の司会をする機会をいただいた。司会は神主さんの動きをよく見て、お祓いを受ける作法を説明したり、玉串拝礼の順番の声をかけたりタイミングを考えることが必要であった。

最後に、参拝客全員で実際に茅の輪くぐりで半年分の厄を落とし、今年度の後半の幸せを祈願した。私も生徒たちの自分たちで刈った茅を使っての茅の輪を実際にくぐったときの感動は言葉にならなかった。

毎年、浅舞八幡神社を参拝し、茅の輪くぐりをさせていただいているが、今年はまさか自分たちのつくったものをくぐることができると思わなかったので、非常に嬉しかった。夏越の大祓の儀式にも参加させていただき、日本の伝統文化を肌で感じることができた。

この三日間の研修で学んだ、日本の伝統文化の継承や儀式の作法、茅の輪くぐり作成の難しさを胸にこれからの授業や日常生活に活かし、生きていく上での心構えを新たにしたいと思った。

３，「特定課題研究」について

次に「短歌会を開く～現代短歌を「読み」現代短歌を「詠む」～」と題して今年度一年かけて特定課題研究を行った。

１　研究の概要

（１）課題設定の理由

私は以前、旧課程である「国語総合」において、「伊勢物語」「芥川」の学習の際に、絵巻物の構造の仕組みを学習する機会があった。そこで「歌物語」というジャンルを紹介

する場面が多々あり、物語の最後に和歌がある歌物語の学習から、「逆伊勢物語」を作ろうということで、物語から和歌を作るのではなく、短歌から「物語」を想像する学習をしていた。この活動は「加藤千恵」という歌人が一般の方から募集した短歌からインスピレーションを得て物語を作るという活動が印象的で授業でもやってみたいと思い実行した。よって、いつか加藤千恵、佐藤真由美、桝野浩一など「現代短歌」を代表する歌人の短歌を使い授業をしてみたいと思っていたことがきっかけである。特に、桝野浩一の短歌は糸井重里により「カンタン短歌」と命名され、口語調の短歌であることが特徴である。口語であることで、老若男女問わず親しめるもので、生徒たちもきっと学びがあると考えるからである。また、私は以前、秋田市大町短歌会と横手市十文字短歌会に所属し短歌を作成していたことがあるので、いつか授業でも短歌会を開催したいと思っていた。「生みの苦しみ」という言葉があるが、短歌を作ることは自分自身と対峙し、言葉を紡ぎ出すことであり、短歌を詠むことは容易なことではない。しかし、短歌を作り終わったあと他と共有することにより、自分でも意図しなかった世界観や側面を発見できる。

そこで今回、「穂村弘」が雑誌ダ・ヴィンチで連載している「短歌ください」という読者から公募した短歌をテーマごとにまとめた作品を参考に、生徒たちに短歌を読み、詠ませる活動をしたいと考え今回のテーマを設定した。

（２）短歌を読む前に

短歌を読む活動をする前に、何か俳句や短歌に触れさせる機会を持ちたいと考えた。そこで、３年生の「現代文」の授業で平成高校の先生方に「暑中見舞い」を書くという活動をした際に、短歌、俳句、名言、好きな歌詞を一つ入れて書くという条件をつけた。すると、好きな曲の歌詞を書く生徒もいたが、暑中見舞いを送りたい先生が好きなキャラクターや好きな食べ物を選択している生徒もいて感心した。生徒が暑中見舞いに添えた言葉の例を挙げると、

「月に柄をさしたらばよき　団扇かな」（月と団扇の絵）

「暗く暑く大群衆と　花火待つ」（花火の絵）

「夏の夜は　まだ宵ながら　あけぬるを　雲のいづこに　月やどるらむ」（月夜の絵）

「飛び込んだ　ラムネ色　泡にはじけて消えた　忘れはしないよ　願いは」（クリームソーダの絵）

というように、また、自分自身がはがきに描いた絵と関連した短歌や俳句を探して添えている生徒も多く、まさに「書くことは『目的意識、および相手意識だ』」という活動だった。

（３）短歌に触れる

「自分のお気に入りの短歌を探す」という活動として、クロームブックを使い現代短歌を探し、自分がいいなと思う短歌を数首ワークシートにまとめた。ここでの反省点は、ただ現代短歌を探すように指示してしまったために、ほとんどの生徒が同じようなサイトを検索してしまい桝野浩一の「ドラえもん短歌」をあげている生徒が多数になってしまったことである。「大丈夫　どこでもドアがなくっても　あなたのことは忘れないから」など多数の生徒が選んでいた。

（４）短歌を読む

穂村弘　著「短歌ください　その二」「短歌ください　君の抜け殻編」の二冊から、１６首選び、生徒に提示した。提示した短歌と生徒からあがった感想を「参考資料　中堅教諭等資質向上研修講座特定課題研究の資料１」にまとめた。

（５）短歌を「詠み」短歌会を開く

短歌を読む活動において提示した「鮭の死を米で包んでまたさらに海苔で包んだあれが食べたい」と「ハチミツのときは熊です　ヤキニクのときは虎です　今は僕です」「自販機と話す女は狂ってるわけではないのよ助けてココア」の３首の短歌を使い、短歌を

詠む活動に取り組ませた。今回は、漠然としてお題を与えるだけでは生徒が作成に臨むのは難しいのではないかと考え、「鮭の死を～」の短歌は自分でお気に入りの「料理」を決め、下の句の「あれが食べたい」を共通とした短歌を作らせることにした。また、他の二首も「今は僕です」と「助けてココア」の下の句を共通にし、短歌を作成するように指示した。このように提示して作らせたのだが、「鮭の死を～」の短歌や「今は僕です」の短歌は作りやすそうであるが、「助けてココア」の短歌については、短歌の背景があまり明確でなく読者に解釈が委ねられているため、「助けてココア」を共通にしても作りづらいのはないかと思っていた。しかし、この「助けてココア」の短歌を何首も作っている生徒が多かったので、生徒の想像力は教師の予想を上回るなと感じた。（以下　参考資料　中堅教諭等資質向上研修講座特定課題研究の資料２　）このように、平成高校普通科の三年生が作成した短歌を使って短歌会を開催した。三年生の普通科ではもちろんであるが、１年生の普通科、総合ビジネス科の３クラスでも平成高校の三年生が実際に作った短歌であると公表し、短歌会を開催した。短歌の感想を書くことはいままでの授業で慣れている生徒たちであったが、感想を共有するという活動が新鮮だったようで活発な意見交換が行われていた。主に、友人の短歌の感想を知れて自分の考え方も深まったという感想が多数あげられた。また、お題「カレー」と提示して、下の句に縛られず自由に短歌を創作する機会も作った。この「カレー」の短歌も楽しんで作っている生徒が多かった。

２，成果と課題

今回、短歌を「読み」、短歌を「詠む」短歌会を開催する活動を通しての大きな成果として、生徒が短歌に親しみ、おもしろさを感じることができたことである。高校３年間を通して短歌というと、古典の和歌を取り扱う機会のほうが多いのでどうしても文法や修辞法の指導に偏ってしまうた。そのため、純粋に短歌を読むおもしろさを感じてほしいと思っていたのでそれが実現できた実践であった。それは、現代短歌を扱ったことで、現代語訳せずに短歌を読み味わうことができたことも短歌に親しみを感じられた要因だろう。特に「短歌を読む」活動としてあげた短歌を見て、今までの教科書に載っているような短歌とは大きな違いを感じたのか「え？これどういう意味？」という驚きの声が多数あがった。このような場面で私が心がけているのは、「意味が分からない」という感想も立派な一つの感想だと生徒に示すことだ。「分からない。理解できない。」という思いも、自分がどんなところに疑問を感じたかを大事にすると、新しい発見につながったり、自分の疑問にフォーカスすることで、自分の感じ方や考えを深められるきっかけになる。実際初見で、「なんだこれ」という声をあげていた生徒たちであるが、書いた感想を読むと深い考察をしていたり、鋭い指摘をしている生徒もいた。そこで、ここであげた短歌から「鮭の死を」「今は僕です」「助けてココア」の短歌からインスピレーションを得た「詠む」活動につなげたのであるが、一つ生徒たちが無意識に行っていたのかもしれないが、とても評価できる点があった。それは、「嬉しい」「悲しい」「楽しい」といった感情を表す言葉をむやみに使わず自分の世界観を表現していたことである。ここで生徒の作った短歌から、俳句になってしまったのだが、生徒同士開催した短歌会においてとても人気のあったお題「カレー」で創作された「おばあちゃん　カレーに　にんにく入れる人」という一句を例に挙げたい。この俳句は、自分の気持ちや感情を表現する言葉は一切ないが、どこか滑稽で可愛らしくさえある「おばあちゃん」の姿をみごとに表現できている。これは、「おばあちゃん」という言葉から作者が「孫」であること、その孫からの「祖母」でも「おばあさん」でも「おばあさま」でもなく「おばあちゃん」という親しみある呼び方および視線が、カレーに「にんにく」を入れるおばあちゃんの意外性から「入れる人」という体言止めにより、どこか堂々と開き直ったかのような姿、

にんにくというカレーに意外な刺激物を入れる行為とは対照的なあっけらかんとした「おばあちゃん」の姿が孫の目線から見てとれるからではないだろうか。このように、自分たちの作った短歌で短歌会を開催し、主に「共感した」「私も同じ体験をしたことがある」というような意見が多くあげれらた短歌会であった。

また、参考資料２にあるとおり生徒が創作した「助けてココア」の短歌を提示する際に①～⑯まで並べたのだが、⑤～⑩までの短歌の並べ方を工夫して資料を作成した。「あの人」に片思いしている女の子が「隣の席」になって「ドキドキ」している様子から失恋して「涙」するまでのストーリーとして並べてみた。もちろん作った生徒は一首一首違うのであるが、「助けてココア」の短歌は「恋している女の子」の心情を表した作品が多く、一つのお話が作れそうだと感じたためそのように並べてみた。実際に短歌会を開催した際に、このストーリーに気づく生徒はいなかったため、私が種明かしをしたのだが、短歌が物語のようになっていた短歌に驚いているようであった。そして、もう一つ並べ方の工夫として、「助けてココア」の最後の短歌を取り上げたい。この短歌は、最後の短歌「帰り道　雪踏みしめてふと思う　迷える人を助けてココア」という作品で、①～⑮番までのすべての「迷える人」を「助けて」という祈りの短歌であり、「助けてココア」の短歌全体に流れる悩みや迷いを総括してくれる短歌であると感じた。よってこの「助けてココア」の短歌の最後の短歌にふさわしいと考え最後に置いた。このことで生徒たちは、「助けてココア」の短歌全体に流れる「迷い」や「悩み」の共通性に気づいたという感想をもった生徒が多かった。よって、今回はただ短歌会を開催しただけだが、短歌を数首並び替えてストーリーを作ったり、一つのお題で連作を作ったりしても面白かったかもしれない。この学習においては、連歌や歌合わせなど歴史的な短歌の遊び方も紹介するとおもしろかったかもしれない。

また、自分たちが詠んだ短歌で短歌会を開催したことは、私が想像した以上に短歌に関心を持つきっかけになっていたようだ。例えば「今は僕です」という短歌から作られた「授業の時はコアラです　部活の時はチーターです」という短歌を見て「陸上部の人かなぁ」と「運動部の人だよね、きっと」というように予想している生徒が多かった。実際に自分たちが知っている友人が作った短歌だということで、作品に親近感がわいている様子であった。今まで短歌を読む活動をしたことはあるが、自分と同じ学校の自分の知っている人が作った短歌となると３年生ではもちろんであるが、一年生も自分の知っている先輩が作ったというだけで作品に親近感がわいているようであった。短歌を読み、短歌を詠むという一連の流れのために、教材の合間合間に差し込んだ形での短歌会だったが、自分たちで創作し、その短歌を使った短歌会という一連の流れにしたことで、短歌に愛着をもつことができたと考えられる。

最後に、この特定課題研究に協力してくれた３年生に対して謝意と卒業にあたっての激励の意味を込めて私も短歌をつくってみた。「平成高校」の「へいせい」の四文字を句の上にすえて「折り句」をつくり、平成高校三年生への餞の一首とする。

「平気だと　言い聞かせながら靴を履き　背筋伸ばして　行く春が来る」

伊藤　由貴子

参考文献　穂村弘　「短歌ください　その二」　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　2014
穂村弘　「短歌ください　君の抜け殻編」株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ　2016

４，終わりに

以上に挙げたセンター研修や選択研修、特定課題研究など今年度１年を通して様々な研修を受けてきた。このような中堅教諭等資質向上研修講座を受講し、今年採用から１５年を迎え、自分自身の授業や働き方、組織の一員として何をすべきかを見つめ直すきっかけとなった。中堅教諭といっても、まだまだ道の途中であり、その都度目標を定め少しずつでも前進していきたいと思う。このような機会をいただいて、研修にあたっていただいた先生方、研究に協力してくれた生徒たちに感謝の思いである。来年度以降もこの研修で学んだことを活かし、自己の成長を目指し少しでも中堅教諭としての目標を達成できるように日々の業務に邁進していきたい。

「中堅教諭等資質向上研修講座特定課題研究の資料１」
穂村弘「短歌ください　その二」「短歌ください　君の抜け殻編」より①～⑫の短歌を提示
（）内は生徒の感想をまとめたもの

①ハチミツのときは熊です　ヤキニクのときは虎です　今は僕です
（その時によって自分がどうなっているかの表現の仕方が面白いと思った。）
（好きなものを前にした時は獣になってしまう人間の野生の部分を感じた。）
（ハチミツとヤキニクというカタカナの書き方が面白い。）
②試着室くつを脱ぐのかわからない　わからないまま一歩踏み出す
（似たような場面を体験したことがあるので共感した。）
（「一歩踏み出す」という言葉が面白いと思った。）
③「元気をもらいました！もっと元気をください！」と迫り来る少女たち
（芸能人のファンかなと思った。女の子たちが怖いと思った。）
（もう元気はこちらには無いですよ。）
④新人とすぐにわかった閉店のアナウンスなのにテンションが変
（アナウンスが初めての新人が緊張しているのかなと思った。）
（新人だから早く帰りたいのかなと思った。）
⑤アリよこい迷彩アロハシャツを着た俺が落とした沖縄の糖へ
（「糖」と「島」をかけているところが面白い。）
（アリが登ってくる様子が想像できる。）
（迷彩アロハシャツがかっこいいので自分も着てみたい。）
⑥ベランダで布団をたたく手をとめる　まだ永遠はやってこなくて
（主婦の日常を感じた。布団の手を止めずにたたき続ければ永遠はやってくるのかも。）
⑦自販機と話す女は狂ってるわけではなのよ　助けてココア
（彼氏に振られたり嫌なことがあったのかなと思った。
（「ココア」で温まってほしい。）
⑧手を振って別れた人のつぶやきを盗みみるのが　デートの続き
（すごくよく分かる。自分も相手のインスタやストーリーを見てしまう。）
（ちょっと怖いと思った。）
⑨ルーターがこびとのいえに見えてきて　午後二時すべて捨てて逃げたい
（同じような気持ちになったことがある。なぜ二時なのかと思った。）
（幻覚を見ているこの人は大丈夫かと思った。ルーターは確かに家に見える。）
⑩一人旅装うブログ打つ君の携帯カメラに映らぬわたし
（ひどい彼氏だなと思った。一緒にいるのにいないことにされていてかわいそう。）
⑪走れ光　わたしの代わりに 翔けてゆき　わたしの代わりに友達作って
（ネットの世界に友達を求めている様子が分かった。）
（「翔る」という漢字がかっこいい。）
⑫十四年後のわたしよ　未来はある　皆教会で笑いをこらえる
（１４年前に何があったのかと思った。結局結婚したということか。）

⑭きっともう神様だって忘れてるわたしを電子レンジが呼んでる

（電子レンジの音が聞こえてくる。私も世界に忘れられていると感じたことがある。）

⑮カップ麺のスープをシンクに流したら今更現る　ブロックポーク

（自分も食べ終わったカップラーメンを流すと肉を発見するのでよく分かる。）

（ブロックポークという言い方がかっこいい。）

⑯未来から来ました的なテンションで肩組みあってプリクラ撮ろう

（自分も一緒にプリクラを撮りたくなる。）

（楽しそう。本当に未来から来たのかもしれない。）

ここで、特に鋭い感想が多数上がった１２番の短歌の感想を紹介したい。

⑫鮭の死を米で包んでまたさらに海苔で包んだあれが食べたい

この短歌では、「私も鮭のおにぎりが好きです」「私は昆布のおにぎりが好きです。」というような感想が非常に多かった。しかし、この短歌は「あれ」とだけの表現で「おにぎり」と明言されていないため、生徒の感想を見ると、「あれ」は「おにぎり」のことを指していると瞬時に理解していることが分かる。この理解がなければ「私も鮭のおにぎり」が好きという感想も生まれないので、このような感想は当たり前のような感想に見えるが、この短歌の内容を正確に把握してるという証拠である。

また、個人的に気になった感想がもう一つある。「おにぎりやん」という感想を書いた生徒が何人かいたのである。最初は「そうそうおにぎりのことなんだよね。」と私も気にとめなかった。しかし、心の片隅でどうして「～やん」という関西弁の表現を使ってた生徒が複数いたのかずっと気になっていた。そんな時テレビでふと漫才の番組を見てはっとした。「鮭の死を米で包んで～」の短歌を漫才の「ボケ」として捉えたのではないかと気づいた。よくある「あーあれよあれ。あれなんだっけ。」という漫才のボケの一面をこの短歌に見たのだろう。だから「おにぎりやん」という感想は「ツッコミ」の役割として出てきたものであるのだ。この感想を書いた生徒はそこまで考えていなかったのかもしれないが、この短歌のおもしろさを様々な側面から捉えた秀逸な感想であるなと思った。

中堅教諭等資質向上研修講座　特定課題研究　資料２

「短歌を詠もう」

平成高校　３年生１，２組の生徒が実際に作った短歌

お題「カレー」

①晩ご飯カレーがいいな　まだですか？　シチューもありね　必ず迷う
②白服の襟に居座る黄ばみから　昨日の夕飯思い出す
③許してね　今日の朝は　カレーより　浮気しちゃうよ　ハヤシライスに
④ポークチキン　ビーフにキーマに　無水もある　どれにしようか　迷う金曜
⑤晩ご飯　メニュー悩んで　冷蔵庫　お肉　にんじん　タマネギ　あっそうだ
⑥どのカレーが好きかって？　俺はドライカレーが好きです
⑦おばあちゃん　カレーにニンニク　入れる人
⑧ダイエット　しようとしたら　カレーの日　本気出すのはまだ少し先
⑨それぞれの　家庭で違うカレーの味　味で感じる　親からの愛
⑩ひとすくい　カレーライスをひとすくい　絶賛絶品　超絶美味しい
⑪夜のカレー食べた後に寝かせれば　明日はもっとよりおいしくなる
⑫辛いもの嫌いな私のお口には　甘口味も　激辛口に

・鮭の死を米で包んでまたさらに海苔で包んだあれが食べたい

①さつまいも切って焼かれて　カリカリに水あめつけてごまふって　あれが食べたい。
②卵割り　米を包んだ黄色で　ふわふわしてる　あれが食べたい
③親鶏を　子供でとじて　またさらに　ご飯にのせた　あれが食べたい
④小麦粉を　細く切って　湯でゆでて　めんつゆにつけた　あれが食べたい
⑤魚たち　酢飯でできた　台に乗せ　くるくるまわる　あれが食べたい
⑥牛の死を　米で包んでまたさらに　サンチュで包んだ　あれが食べたい
⑦冬の時期　赤い宝石　きらきらと　辛いの食べたい気分　あれが食べたい
⑧焼いた生地に　フルーツ　ホイップ　チョコソース　ぐるっとまいた　あれが食べたい
⑨ネズミの死を　ハチミツとからめて　タコで包んだ　あれが食べたい
⑩夏は日差し輝いて育ち　冬おもちの上に乗っている　あれが食べたい

・ハチミツのときは熊です　ヤキニクのときは虎です　今は僕です

①授業の時はコアラです　部活の時はチーターです　今は僕です
②笹の時はパンダです　ユーカリの時はコアラです　今は僕です
③中学の時は俺です　未来は私です　今は僕です
④推し活の時は虎です　読書するときは　フクロウ　今は僕です
⑤かぼちゃのときは　おばけです　ピザのときはサンタです　今は僕です
⑥数学のときは　アリです　世界史のときはゾウです　今は僕です
⑦兄生まれ　姉が生まれて　その後に　ここに生まれた　今は僕です
⑧味噌汁の時は猫です　スタバの時は犬です　今は僕です
⑨音楽をきいている時は　サウンドクラウドです　映画の時はネットフリックスです　今は僕です
⑩お寿司の時は猫　アイスの時はホッキョクグマ　今は僕です
⑪学校の時は黒です　お出かけの時は白です　今は僕です

・自販機と話す女は狂ってる　わけではないのよ　助けてココア
①外が寒い　心も寒いこごえそう　そんなときこそ　助けてココア
②防寒着失くして過ごす　冬景色　かじかむ手を　助けてココア
③人生が詰んでる男　ヤバいけど　まだいけるかな　助けてココア
④帰宅して　着替えた後に　席に着き　悩み爆発　助けてココア
⑤あの人は　コーヒー　カフェオレ　どちらだろうか　助けてココア
⑥彼が隣　座っているの　緊張する　ドキドキするわ　助けてココア
⑦あの人と　話すきっかけちょうだい　助けてココア
⑧斜め前　先週振られたアイツいて　頼るは君だけ　助けてココア
⑨冬の日のあなたが好きなココア見て　胸が苦しい　助けてココア
⑩なめないで　女の涙　安くないのよ　助けてココア
⑪寒すぎて口が回らん　助けてココア
⑫あたたかい　ねこがほしいよ　助けてココア
⑬冬のベンチと話す人は　狂ってる　わけでないのよ　助けてココア
⑭ヤキソバと話す女は　狂ってる　わけではないのよ　助けてココア
⑮大変だ　鍋の季節がはじまっちゃう　助けてココア
⑯帰り道　雪踏みしめて　ふと思う　迷える人を　助けてココア

「短歌会」を開催した感想のまとめ

・自分も実際同じことを思ったことがある短歌が多くて共感した。
・上手な短歌が多くて驚いた。
・「鮭の死を～」の短歌がそれぞれ何の料理科考えるのがとても楽しかった。
・他の人が気に入った短歌の理由を聞くことができて、様々な考え方や感じ方を知ることができて良かった。
・自分の知っている先輩が作ったと知って驚いた。誰が作ったのかなと思った。
・「助けてココア」の短歌が物語になっていることを知って驚いた。面白いと思った。
・「助けてココア」の最後の短歌がすべての短歌の悩みをまとめていると知ってびっくりした。そのような考え方もあるんだと思った。
・また短歌を作って短歌会を開きたいと思った。
・違うお題でも作ってみたいと思った。
・みんなが作った短歌を読んで、様々な感想を交換できて自分の考えが深まった。また、機会があったら短歌をつくってみたい。
・いままで短歌を作ったことがなかったので新鮮だった。

実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）を終えて

保健体育科　　秋元　延大

１．はじめに

教師となって２年目となり、本校のリズムなどにも慣れてきたことで、ようやく少ずつ教諭としての自らの指導方針などが見つかり始めてきたように思う。しかし、いろいろな事が見え始めたからこそ、新しい課題や悩みも出てきた。特に生徒の実態に合わせた指導力の向上、関わり方には初任者研修で教えていただいたように日々精進する必要性を感じている。今年一年を振り返ることで、これから続く教育活動の土台を強固にしていきたい。

２．研修について

今回の研修では、より実践的なクラス経営と専門教科の指導についての研修であった。私自身も含め、多くの者が担任としてクラス経営をしており、保護者対応など具体的な内容から実践力の向上を図った。講義・演習を通して、保護者の思いを受け止める重要性や、事実確認などを通じて自分のペースで話を進めるなどのテクニック的な部分など、より実践的な研修を行った。保護者と連携して生徒を指導していく視点を忘れずに、生徒の成長の手助けをしていきたい。また、クラス経営では学級目標と学校教育目標とのつながりの視点から、目指す生徒像や、やるべき指導、クラス作りのイメージがより鮮明となった。クラスや学校の強みや弱みを明確にし、クラス経営に生かしていきたい。専門教科の指導については、テーマが「学校教育目標に基づいた学習指導」であった。初任者研修で学んだ基礎を土台として、各学校の教育目標や教科ごとの目標、生徒の実態に合わせた授業作りを学ぶことができた。自らの授業や同期の授業を動画で振り返りながら、成果や課題について意見をかよわせ現在の取り組みについて評価することができた。また、個別最適な学びと協働的な学びについて、学習者視点からのワークショップを行った。学ぶ側の気持ちから、何に悩み、不安に思い、出来る生徒は何を感じ、という視点から全体に対する手立てや工夫のアイディアが浮かぶことが新鮮であった。生徒主体の授業作りという意味を、より深く理解できた。授業を通じて、クラス経営を通じて、学校全体として目指す生徒を育成できるように取り組み続けたい。

３．おわりに

本年度の研修を振り返ると、学校や保護者、地域と連携して生徒を育んでいるという視点がより明確になったと感じる。クラス経営、専門教科を中心に、これから多くの生徒・保護者と関わっていく。学校の実情や生徒の実態を踏まえて、一人一人の生徒と向き合い対応して、生徒を成長させていける力を身に付けていきたい。短いながらも今まで取り組み経験してきたことを自信にしながらも、過信して自身の学びを止めないようにする重要性を再確認した。これからも向上心を持ち続けて、懸命に努力し続けていきたい。

生徒が科学的に探究する高等学校理科の授業づくり

藤谷　希

1　研修の目標

生徒が科学的に探究する授業となるよう、単元や授業をデザインするために必要な、自然の事物・現象についての専門的な知識を身につけ、高等学校理科の授業づくりについて理解を深める。

2　期日・場所

令和５年９月４日（月）　総合教育センター

3　日程

講義・講演　「生徒が科学的に探究する教材の工夫や授業の構想〈地学分野〉」
講師　秋田地方気象台　予報官　村田　一則

講義・観察・実験　「生徒が科学的に探究する教材の工夫や授業の構想〈生物分野〉」
講師　秋田大学教育文化学部　教授　石井　照久

4　内容

「生徒が科学的に探究する教材の工夫や授業の構想〈地学分野〉」

①高等学校学習指導要領における自然災害と防災　②気象災害の種類
③気象庁の発表する防災気象情報　④キキクル
⑤演習　気象庁ワークショップ「大雨、そのときどうする？」

学習指導要領「地学基礎」に、「日本の自然環境を理解し、それらがもたらす恩恵や災害など自然環境と人間生活との関わりについて認識すること。」とある。自然災害と自然の恩恵は表裏一体であり、そのためにも防災が必要である。災害の予測や被害を低減する取り組みについて、科学的に探究し、立案させる授業が必要だと感じた。

「生徒が科学的に探究する教材の工夫や授業の構想〈生物分野〉」

○講義：授業の実践例
①最新の科学ニュースを紹介する　②面白いエピソードを紹介　③顕微鏡観察のコツ
○実験・観察・素材収集（顕微鏡を用いて）
・コウジカビ、酵母菌、イシクラゲ、乳酸菌、納豆菌、サニーレタスの細胞の観察
・酢酸オルセイン染色、メチルグリーン・ピロニン染色

講義では、最新の科学ニュースやそれに関連する情報、日常生活に結びついた面白いエピソードやそれに関する情報、文献の紹介があった。また、　実験観察法、実験材料の調達の仕方を教えていただいた。

5　受講しての感想

この講座を受講するのは３回目であるが、毎回異なる実験・観察の手法を学ぶことができ、とても役に立った。今回もたくさんの動画や写真を撮ることができ、授業で活用したいと思った。また、生徒にやらせるには作業が難しく、なかなか実施できなかった実験に関しても、簡易な実験方法を教えていただいたので、授業で実施したいと思った。授業力を高める、有意義な研修だったと思う。

編集後記

各教科において、研究主題（テーマ）を設定して校内授業研究会において活発に活動しました。

また、相互授業参観も新たな装いで取り組みました。お互いの授業を見るのを日常化しようという試みでした。

電子黒板やグーグルクロームブック等を活用した ICT 活用の取り組みも日常的に行われ、生徒の興味・関心を引き出す授業実践に取り組んでいます。

最後に研修集録を見ての御意見・御感想等お待ちしております。何なりとお寄せください。

令和５年度　研　修　集　録

発　　行　　令和　６年　３月　８日
編　　集　　秋田県立平成高等学校
ＴＥＬ　０１８２－２４－１１９５
ＦＡＸ　０１８２－５６－３００８
http://www.heisei-h.akita-pref.ed.jp/wp/